

トラック 6-2

昔、男と女がいて、男の子を儲けた。その子は騒がしい、本当に騒がしい子供で、ある日両親はその子を学校に入れることにした。子供を学校に連れて行ってから、両親は文房具、つまり何か書くためのノートを探しに行ったが、当時はそのようなものはなく、あるのはクルアーンを書く木板だった。その上に文字を書くのである。

父親がこの書き板を探しに行ったのは、その子が勉強を始めるためだった。彼は勉強を始め、大層勉強をしていたが、あるスルタンが権力を握ることになった。このスルタンは傲慢な男で貧しい人々を見るのが嫌いだった。

ところで、その頃は、ビヤバと呼ばれる太鼓があった。ある日、スルタンはすべての住民を集めることを決めた。彼はこう言った。

「太鼓ビヤバのある場所を見つけた者に、我が娘との結婚を許す」。

イツァンドラの町中(の男)が立ち上がって、イツァンドラのスルタンの娘と結婚出来るために太鼓ビヤバを探しに出かけた。彼らはあちらこちら堂々巡りをして、丸々一年の間辺りを探し回った。

書字板で勉強していた子供は、呪術師の才能もまた獲得していた。ある夜、彼は奇妙な夢を見た。その夢では、ある人が現れて彼にこう言った。

「ヴォワンツォゴマと呼ばれている場所に行け。なぜなら、そこでお前はスルタンが探している太鼓を見つけるからだ」。

彼は朝になって起き、お祈りをしてから出発した。彼は歩きに歩き、さらに歩いて、一群の人々と道ですれちがった。彼はとうとう海辺のある町に行き着いた。彼は水をくれるよう頼んだが、人々は彼にやるのを断り、水が干上がったのだと言う。それは乾季だった。

彼は歩き続け、歩いて歩いて、村のはずれまで歩いて、そこで老婆(ドゥルココ)に出逢った。彼は水を求めた。彼が飲み水を頼んだとき、老婆は叫んだ。

「お前は私の水を飲もっていいのかい」。

「はい、できれば」。

老婆はリジ(水を汲むための木製のもの)を探しに行った。彼女は水を差し出し、彼はそれを飲んだ。水を飲んでから彼は老婆に尋ねた。

「立って、一緒に出かけましょう。私は知らない場所に行かなくてはならないのです。その場所はここから近いので、あなたはきっと知っていると思います」。

老婆は親切に、彼についていった。彼らは歩きに歩き、歩いた。それで、彼らは歩き終えてハムツォゴマと呼ばれる場所に着いた。彼らがハムツォゴマに着いた時、水が上がり始め、その場所は水位が上がって浸水した。その時彼は老婆に言った。

「私が何故あなたについて来るように言ったかわかったでしょう。もし、あなたが親切にも私に水をくれなかったら、あなたはこの水で溺れていたところです。これは徴なんです。水はハムツォゴマに洪水を起こしたことでしょう」。

彼らは道を進み続き、歩きに歩いた。老婆は彼に言った。

「ここだよ。この森の中」。

その時、子供はイツァンドラのスルタンが、ここに隠されている太鼓を見つけた者は誰であろうと、

彼の娘と結婚すると宣言したことを彼女に説明した。老婆は叫んだ。

「それじゃ、お前が探しているのは太鼓ビヤバなんだね！」。

「さあ行こう、行こう」。

彼らは一緒に森の奥深くまで分け入って家を見つけたがそれはジンたちが建てたものだった。

老婆は、ジン達がそこで待ち構えているに違いないと言った。子供は彼女に尋ねた。

「ココ、あなたはこの家に入ったことがあるのですか？」。

彼女は答えた。

「いいや、入ったことはない。これはジンたちの家なんだ」。

老婆は怖くなった。

「ここから離れて、横になろう」。

老婆は言った。

「ほら、ジンたちの家が見えるだろう。あそこにあの太鼓はあるんだよ」。

子供は尋ねた。

「それじゃ、それを取るにはどうすればいいのですか？」。

老婆は勇敢な女性だったのでこう言った。

「待ってなさい。私がジンたちの家の中に入ってみよう」。

「あなたはジンたちの家の中に入ろうというんですか？」。

「そう、行ってみる。怖くはない。あいつらと話をしてみる。坊や、お前に会って、お前が太鼓を入手なのだから、神のご慈悲でお前が取れるように助けてやろう」。

老婆は神に祈りながらジンたちの家の方に向かい、言った。

「お前はここで待っていなさい。太鼓は家の中にあるのだから。ジンたちと話をしたぶん注意をそらせると思うので、お前はその時に太鼓を取って立ち去ることができるでしょう」。

老婆は離れて、子供は遠くから様子を見るために寝そべった。夜は日もとっぷり暮れてすっかり夜になっていた。実は、老婆は行く前に子供にこうも言っていた。

「お前が太鼓を取れるのはたぶん夜の間だよ」。

「でもどうやってその時が私にわかるんですか？」。

彼女は説明した。

「もし私のいびきが聞こえたら、それは私が眠っていないという徴だし、いびきが聞こえなかったら、それはジンたちが眠っているということだ」。

それで、彼は真夜中過ぎまで待った。

ジンたちは順に眠りに落ち、いびきをかき始め、おばあさんもいびきをかき続けた。朝の三時になって、彼女は静かにした。子供は立ち上がって家の中に入り、ジンたちが疲れて眠りこけているのを見た。ジンたちの様子を見てから、彼は太鼓を取って外に出た。外に出る時に、老婆は怪しまれないように、子供に言った。

「家から遠く離れたら太鼓を叩くんだよ」。

そうして子供は遠くに太鼓を持っていった。水に浸されていた、ワンツォンゴマと呼ばれていた場所まで来ると、子供は太鼓を叩き始めた。

彼が太鼓を叩き始めた時に老婆はジンたちを突然起こした。

「あんたらが眠っているのに、あんたらの太鼓が遠くで聞こえるよ！」。

ジンたちは起きた。彼らは子供のあとを追いかけて走ったが、子供を見つける前に、日が昇っていたのでジンたちは家に戻った。彼らは老婆に、ジンになるという呪いをかけた。それで今に至るまで老婆はジンのままだ。

子供は太鼓を持ってイツェンドラのスルタンのもとへ到着した。彼はスルタンに挨拶をしながら太鼓を渡した。その午後に住民が集められた。太鼓は町の広場に担がれてきた。それから彼はスルタンの娘と結婚した。彼はスルタンの娘と暮らした。老婆はジンになってしまったが、彼女がまだ生きているか、大地の下6尺のところにいるかは今もわからない。これが私のお話。